



職人道を身に付け、世界に魅せる

# 南アルプスから生まれる 和製ヴァイオリンの美

松上一平さん Ippei Matsukami

ヴァイオリン職人

文・林えり子 Eriko Hayashi 写真・生津勝隆 Masataka Namazu

にっぽんの  
100人の  
青年 88

NIPPON NO  
100NIN NO SEINEN



# 松

上平さんは、世界が認めた若きヴァイオリン製作者である。楽器製作会社とくに属さず、たった一人でプロ職人の道を歩んでいる。

工房は、山梨県南アルプス市の自宅にあるという。山里風景を描きながら、甲府駅から西へ南アルプスと呼ばれる赤石山脈方面へ車で40分ほど、到着すると想像とは違う景観である。楡形山を望む丘陵地なのだが、宅地化された住宅街だった。

中腹に建つ2階建家屋が松上さんの住まい。しかし、木製にヴァイオラを描くしやれたプレートでも掲げているかも、の予想もはずれてしまう。

これから会う青年は、2年前2012年9月、イタリアのクレモナで行われた第13回アントニオ・ストラディヴァリ国際ヴァイオリン製作コンクール（ヴァイオラ部門7位入賞、同時に若手最優秀賞、サツコーニ賞）も授賞した。ヴァイオリン製作は「修業10年」と言われるのに10年を待たずして27歳の若さで世界に知れた2賞を授かった。

門扉や玄関に、晴れがましい氏名表示を出して当

たり前だが、そうした物は一つもない。苗字表札があるきりだ。

この謎はすぐに解けた。玄関ドアが開き、「どうぞ」と招き入れた青年は、長身の細面、人品骨柄のよさをしのばせる風貌に自己宣伝など好まない謙虚さがないにじみ出ている。看板を出そうなんて俗物的発想など持ち合わせていないのだ。

道元禪師（1200〜53）の『正法眼蔵現成公案』を説く老僧の言を思い出した。「姿という末端的、作為的、技巧的なものと思うだろうが、姿こそはその人の『真』である。正体である」。

じかに会ったからといって、その人の生い立ちだの修学、経歴、家庭のことなど見極めのつくものではない。しかしながらその人の品格とか風韻、ありのままの姿を見ることができるといえるのである。

その若者が「狭い部屋ですよ」と通す2階の8畳大の洋室の工房へ入った瞬間、私たち取材陣はいっせいに、「わあ、いいなあ」、感嘆詞を上げたものだ。

職人の工房独特の雰囲気、潜在する悠久の昔から味わってきた物造りの感興を刺激したのか、いや違う、工房の主が醸し出す一種優美な空気感に、うつろいとしたのだと思う。

部屋の正面と左手には横長の奥行きは広くない机が置かれ、窓際の机には今造りかけの白木のヴァイオラ。壁にはヴァイオリンの実物大カラー写真、モノクロ型紙がさまざまピンで留められている。右手の壁面は材料の木々が積まれた棚、隣には道具の引き出しダンス、床には細かいカンナ屑がちらほら……。

そして再び、私はダメを食らった。ヴァイオリン職人の工房だもの、ヴァイヴァルディのヴァイオリン協奏曲なんか、静かに流れているはず……。

しかし、工房はまったくの無音だった。山並み迫る宅地は昼間といえども騒音の一片もなく、その静寂が室内を静まり返らせ、鼓動でも聞こえそうだった。ご両親と弟さんの家族は勤め先に出ているので家内に物音はない。

「テレビもラジオも、携帯も置きません。家電話が鳴っても出ないことにしています」といふの、作業に集中するときは音楽といえども邪魔になるのだろう。

松上さんが豆カンナを使ったとき、シュツシュツという小さな音が耳に心地よく響いてきた。

## 1つの出会いが変えた心 少年は職人を志す

京都に生まれてすぐに父の生地山梨へ抱かれて移り、現在地で高校生まで過した。音楽に馴染みのある家庭環境でもないが、

「母に連れられて小さい頃からヴァイオリン教室に通いだしたのが、端緒だったと思います」

人間多種多様だけど、ヴァイオリンを弾きながら、ある子は演奏家を夢見、ある子は手にする楽器の精巧さに見惚れる。個性というか素質の発露の先に、それぞれが各自の道を進むのだ。でも、松上少年が将来像を描くのはまだ先のことである。

「ぼんやりと物を造る仕事がいいな……」



工房には欧州産の楽器用木材が整然と並ぶ



## 個性を無理に出そうとはしない 伝統美を極め、その先を見つめる

つまりは、手先の器用さについて自負するところが、小さいころからあつたらしく、

「工作でガラス瓶に粘土細工で造形作品をつくったとき、先生がガウディみたいだねって」

最高の褒めことばだと思いが、謙虚な彼は「いまだに覚えている一言です」。しかし、心に灯はともる。

高校卒業を前に進路を決めかねていたときだ。ヴァイオリン教室の先生が東京の製作工房へ行つてみないか。まさか、その日が、開眼記念日になるとは考えもしなかったろうが、眠っていた職人魂が産声

をあげ、進むべき道がはっきりと見えてくる。

「ヴァイオリン製作科のある専門学校、

国立音楽院へ入り修学、在学中から世田

谷区成城学園前の工房、弦楽器トリオで3年間修業し、卒業後もお世話になりました」

自宅に戻ると製作一筋。完成したヴァイオリンやヴィオラは、東京の楽器店などが販売に一役買ってくれた。

「製作者といつても、プロとアマチュアの線引きは

難しい。趣味で製作する人もいて……」

資格もない社会でプロと言つてもいいが、彼としては世間が認知する技量を得た上でプロの職人ですと胸を張りたい。コンクール出品は、そのためでもあつたらう。

まずヴィエニヤフスキとパリのコンクールに出品し、3年に1度イタリア・クレモナのストラディヴァリ国際コンクール出品は3回目の挑戦。第3回大会1982年ではヴァイオリン部門で園田信博氏が優勝、先人たちに続いたのが松上さんだった。

今年6月にはヴァイオリン製作の



豆カンナも全部自らが手づくり

町、ドイツ・ミッテンバルトで開催の「ヴァイオリン製作コンクール」へ出品した。ヴィオラで9位である。

「口惜しい結果でした。でも、コンクールは収穫がたくさんあります。上位獲得者の楽器を見るのができ、製作者と

相対で話し合えます。会場近くには楽器博物館があるので伝統の名品をつぶさに見学でき、ほんとうに多くを学べます」

以前は、一目見て「松上が造った」とわかる個性のある楽器を目指したが、ヨーロッパ諸国で伝統の名品を見歩かうちに恩師である山田聖氏、ドイツ国家資格ヴァイオリン製作マイスターの「ふつうのヴァイオリンを造りなさい」のこぼを強く意識できるようにになった。ふつうとは平均的標準的の意味ではなく、自然の美しさ、数百年弾き継がれて来た名器の持つ伝統美ということだ。

「西行」という江戸の昔から職人衆の間でつかわれていることばがある。職人衆は一定の基本的修業が終わると旅に出、西行が諸国を歌行脚したように、各地で他人の仕事を見て廻り、今まで知らなかった技術を身につけようとした。そうした職人道を知らぬ間に身につけて、平成の松上青年は、世界という諸国をめぐる技量を究めようとしている。

はやし・えりこ 作家。著書に『清朝十四子女川島芳子の生涯』（ウエッジ文庫）や『暮しの昭和誌』（海電社）、『江戸・東京通物語』（ソフトバンククリエイティブ）等がある。

